

報道関係者各位

プレスリリース

2017年3月14日

バイオテック情報普及会

輸入国日本から見た遺伝子組換え作物の経済的インパクトについて調査報告を発表
～GDPに占める経済価値は約1%、コメ産業の3分の2相当、輸入停止で畜産、酪農製品や植物油の価格が約2倍に

【ポイント】

1. 遺伝子組換え作物（大豆・トウモロコシ）^{*1}の日本経済に対する経済的貢献

- 遺伝子組換え作物の経済的貢献度を産業連関分析モデルで推計した。GDPに相当する粗付加価値額で見ると約1兆8千億円（所得変化の需要に対するインパクトを含まない）～4兆4千億円（所得変化の需要に対するインパクトを含む）であり、GDPの約0.93%に達する。
- 所得に換算すると、1世帯当たり年間約2万5千円（同上）から6万円（同上）に相当する。
- 同一モデルで算出したコメ産業の経済的貢献度の約3分の2に相当する。

2. 遺伝子組換え作物（大豆・トウモロコシ）の輸入を停止した場合の影響

遺伝子組換えトウモロコシおよび遺伝子組換え大豆の輸入を停止させた場合の日本経済への影響を応用一般均衡モデルで推定した。一定の条件（代替品の調達を考えない）で試算すると、

- 国産トウモロコシの価格は約2.5倍、国産大豆は約1.9倍、国産の鶏肉、卵は約2倍、国産動植物油脂は約1.9倍に上昇すると見込まれる。
- 結果として、実質GDPを約0.61%押し下げる。

【調査の背景】

日本は遺伝子組換え作物の栽培国ではないものの、年間約1,700～1,800万トンの遺伝子組換え作物を輸入する輸入消費大国です。しかし、その実態はあまり知られておらず、安全性やその必要性について国民の理解も十分得られていません。遺伝子組換え作物の栽培による経済的インパクトに関する研究論文は少なくありませんが、輸入による日本経済へのインパクトに関する論文はほとんど見当たらないことから、今回、その実態を探るべく、輸入国としての日本から見た遺伝子組換え作物の経済的インパクトについて、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻経済学研究室の本間正義教授・齋藤勝宏准教授のチームが調査を実施し、2016年10月23日に環太平洋産業連関分析学会で発表しました。

【ファクトシート】

1. 日本の穀物自給率は、トウモロコシはほぼ 0%、大豆が約 7%で、多くを輸入に頼っている。トウモロコシの総輸入量は年間約 1,500 万トン、大豆は約 320 万トン。
2. そのうち、遺伝子組換え作物が占める割合は平均約 85%、大豆は平均約 92%。
3. ナタネやワタなどを含む遺伝子組換え作物全体の推定輸入量は約 1,700~1,800 万トン。
4. 輸入相手国は、トウモロコシは主に米国（約 80%）とブラジル（16%）、大豆は米国（70%）とブラジル（15%）とカナダ（11%）など。
5. 遺伝子組換えトウモロコシは主に飼料やでんぷん（コーンスターチ）、ぶどう糖など、遺伝子組換え大豆は主に、食用油やその搾りかすが飼料として使われている。
6. 現在、でんぷん及びぶどう糖の約 77%、大豆油のほぼ 100%、畜産・酪農関係の約 68%の生産を遺伝子組換え作物に依存している。

*1 現在日本で流通している遺伝子組換え作物にはナタネやワタなどもあるが、本研究においては大豆・トウモロコシのみを計算に用いている。

【調査結果に関するお問い合わせ】

東京大学 農業・資源経済学専攻
経済学研究室 准教授 齋藤勝宏
電話・FAX 03-5841-5319

【その他本件に関するお問い合わせ】

バイテク情報普及会 事務局
電話：03-3525-4805 / FAX：03-6206-4185
<http://www.cbi-japan.com/>

以上